

遠藤家文書にみる石川雅望と遠藤春足

佐藤 武

はじめに

遠藤春足については『江戸風雅』三十号で立石恵嗣氏が詳しく報告したのでここでは繰り返さない。

春足が残した文書（遠藤家文書）のうち、質・量、共に中核を占めるものは狂歌に関するものである。中でも春足の師・石川雅望（宿屋飯盛）に関する文書はひときわ多く、また遠藤家では大切に保存してきた経緯がある。その数は現在のところ一六〇点を越えており今後の調査で更に増えるものと思われる。

前回、立石氏が述べたとおり、春足については先行研究がいくつかなされている。特に鈴木馨氏・藤井喬氏・粕谷宏紀氏はその著作物から見てかなり詳しく調査された形跡がある。しかしその三氏においてもどの資料に基づくかまでは明記していない場合が多く、また、全体を把握していたかどうか不明である。これは当時の諸般の事情からみてやむを得なかったものと思われる。

今回、私たちは新しく資料の管理者となられた遠藤雅義氏の全面的な協力を得て、すべての資料を調査する機会が与えられた。調査はまだ継続中であるが、今回はその中から特に興味をひかれたものをここにいくつか紹介しようと思う。なお本資料は、佐藤が解説を試み、遠藤が「狂歌文書館」というWeb（ホームページ）を作り、そこに保存したものである。「試み」と言うのは、私の能力不足で読めない箇所、また間違っている箇所が多々あると思われるからである。不完全なものをなぜ公開したかといえば、完全を期してこの資料群が再び埋もれてしまうことを恐れたためであり、またたとえ不完全でもデータ化することにより、検索の手がかりを作り、利便性を高めることができる考えたからである。どの資料にも精細画像を添付し、写真番号を付してあるのでより詳細に御覧になりたい方は、「狂歌文書館」にアクセスし、当該の画像を検索していただきたい。

一、春足、雅望入門に至るまで

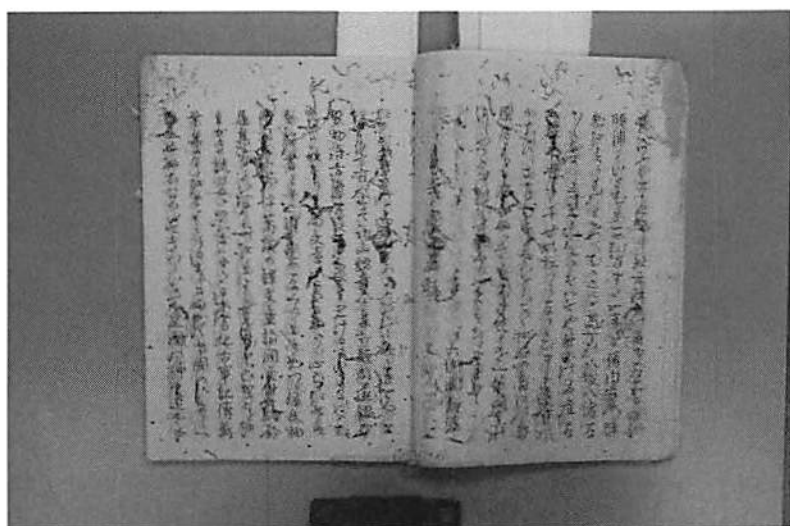
春足は十一歳の時、相次いで両親を亡くし、祖父・治兵衛が後見人となって、五代目宇治右衛門として家督を継いだ。本業は藍商であるが、後の資料で見る通り、若い頃から文学方面への関心が強く、多方面にわたる古典籍をよく読んでいた。本格的に狂歌を実作し始めたのは、祖父治兵衛が死去した文化六年（1809）春足二十八歳以降である。そのいきさつは春足晩年の随筆『六々園漫録二』に「六々園（とい）ふ号」という小見出しで綴られている。まずそれを紹介しよう。

（解説文中□は虫害による判読不能、？は筆者の能力不足による判読不能の箇所である。）

○六々園□□ふ号 （画像番号 P2102219）

（前略 概要）

①二十歳頃からなんとかして和歌を詠みたいと思い、『百人一首』『初山踏』『古今集打聴』『同遠鑑』『伊勢物語古意』など、更に『源氏物語玉小櫛』『伴蒿蹊の『訳文童論』『国文世々跡』『鈴屋集』『日本書紀』『古事記』『万葉集』などを読むうちに我が国の古代を慕う心が強くなり、皇国の神の道を理解したいと思うようになった



て、鈴屋の著作を読むようになった。

②しかし師と仰ぐ人はおろか共に語らう友とてなく独りよがりの間違いも多かった。

③歌は鈴屋の歌を参考に、古体、近体の長歌・短歌を作ってみたが

見すべき人もなく筐底に秘したままであった。

④その頃、本居大平が紀州公に仕えているということを知り、名簿を送り、歌・文章の添削を乞うようになった。

(本文) (p2102220)

また狂歌といふものゝ

ことハさらにおもひもよらざりしを文化五年の春

讃岐国へものしける時旅中の日記

地の方上五
フニ巻アリ

には

□□俳諧めきたるをも一ツ二ツよみいれ□□□□いと

興あることにおほえてこれよりハをりにふれことにより
てはたれたるをもよみいづることゝハなりたりされ
と狂哥の集などゝてはたゝひとつたに見たることも

あらざりけるをたままたま林々葉(?)のもとより貞柳の狂

歌置土産狂哥今ハむかしなといへるものをえて

よみけれとたゝこと葉の秀句にのミかゝはりてなかなか

に滑稽の情うすきやうなれハおのれかこゝろにか

なはぬことのミおほくて大かたハよますなりぬさるを

□□□□なる萃雅堂か江戸より千種庵霜

解の選める狂歌幕之内という書をもてかへりて

見せけるに□□かの貞柳などのよめるふりとハ

いたくかはりておのれがこゝろにかなへるふしも多け
れは此よりハ此幕之内の風調をむねとうつしよ

ミける□□□□おの□□江戸の店にて家わさの事と

とものと□□□へる武兵衛といへるものゝきて金鶏入道

の狂哥闇雲愚抄といへる小冊をみせけるにそいよゝ

江戸の狂哥の□にすくれたることをさとりはた六樹園

□□の狂歌のひとりぬけ出ておもしろう興あること

をもしろいしりそむることにハなりたなり抑此宿

屋飯盛といへる人のことハはやうきゝけることもあり

けれとたゝ安永天明あたりの人とのミおもひ居りける

を今もかくさかりにものし給ふといふことハ此武

兵衛のものかたりにてはしめてきゝしりつゝさらハ此道の

師とたのむへきハ此人ならてハとそおもひなりにける

此武兵衛といふハ狂名花暮雪といひて則六樹園

翁の門人にて其ころ月並の集冊などにもよめる哥

あまた出てありけれハよきたつきをしもえたる

ものかなとかきりなくうれしくてそれよりハ家わさ

のことにつきてふみつかハすことにハかならず□□此道

のことなどをそとかくゆひやりけるかくて文化六年の

□おのれかよめる歌とも五十首□摘出つゝ蜚のた

く縄くるしからずは六樹園翁にも見せ給へとて

か□暮雪のもとにおくりつかハしけるにいかなれハ翁

にハ見せず□□暮雪のこゝろもてとあらんかくあらん

などみ□□かへ□おこせけるにおのれのおもへるとハ

いたうかハりてたゝ意にかなはぬことのミおほかりけれ

ばまたのとし春ふたゝひ書清めて上書に猿か人

まねとかひしるしていさゝかしりかきをも加へてかの翁

のもとにつかハしけるに翁もうた文ともにいミしう

ほめ給ひておくに

木のほりの高きこと葉にさるもゝの

四国にありとわれさへそしる

とそかきつけておこされける是なん此翁の門にいり

たるはしめにハありけるさて此うたのかへしハかくなん

いひつかハしける

さるものと君の仰せにいとゝわか

つらも真赤になりてはつかし

是よりハひたふるにかりのいきかいたえすして時々よ

めるうたをも見せなとしてかの狂歌萬代集作者

部類などいへる集にもあまた加へることゝハなりたる

□りさて文化九年の春家わさ□□ことにつきて江戸

にくたりける時はしめて六樹園翁にたいめして

したしくもの語りをもちきゝはた著し給へる書

なとも□□□□見ていよいよ此翁の学ひさえのすく

れたる□□□もしりつゝますます此翁を信してよ

□□ひ聞ことになんありける（以下略）

【語注】

*萃雅堂 春足の弟遠藤昂美（たかよし）寛政二年〜文政四年。

画家。谷文晁に師事した。

【気づき】

当時、遠藤家は藍の関東売り三十六人の一人に数えられ、江戸に出店を構えていた。武兵衛は江戸店の使用人と思われる。武兵衛は狂名「花暮雪」という名で五側の月並の書冊にも度々名前が出る狂歌師だった。文化六年刊の「新撰狂歌百人一首」（江戸狂歌選集 東

京堂出版所収) には「花暮雪 別号瓊樹園 封しめのまゝにてかへす文よりもひらけぬ胸を誰に見せまし」が入集している。

二、師との対面・交流

遠藤宇治右衛門宛て五老書簡 (手鑑231-2)

春足は家業の関係で三、四年に一度は江戸に出向いている。庶民にとって移動がままならない時代にこれは大変好都合なことであった。彼が江戸の文人達と交流し、その墨跡を多く集めることができ、たのもそのお陰である。次の書簡は冒頭の季節の挨拶がないこと、差し出しの日付が「四日」としかなく、内容から春足が江戸滞在中の書簡というより連絡と思われる。

尚々明後六日福のやへ

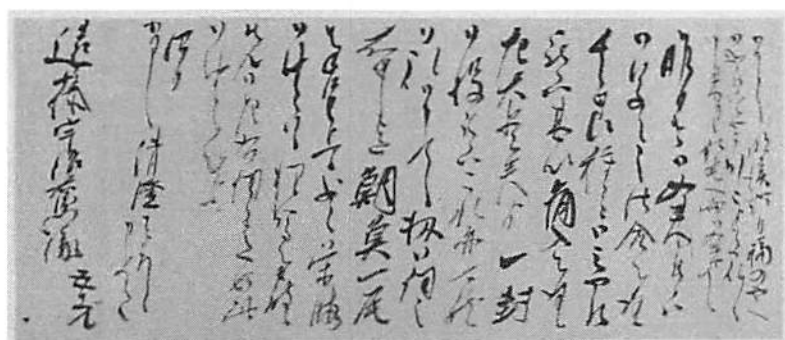
御出被下候やうかしこ方もくれくれ

申来候拙宅へ向入来可 (被下候)

昨日は御入来被下

御草々之仕合奉存候

其節種々御ミやけ



被下甚心痛入奉存候

左大尽君より一封

御授被下これ亦可然

御礼御申可被下候扱御伺之

しるし迄鯛魚一尾

奉呈上候少々栄暇

御座候ハ、枉駕奉待候

先御左右伺？迄如此

御座候以上

四日

尚々清澄もよろしく

申上候

五老

遠藤宇治右衛門様

【語注】

*福のや 福廼屋内成。飯盛の門人。七宝連の判者。（コトバンク）

【気づき】

文面によると前日三日、春足が五老宅を訪問し、その折、種々土産も持参したようである。「左大尽」（右大尽の間違いか）は春足社中の有力メンバーでこの文書中にしばしば登場する人物である。この人物からも「金一封」の贈り物があつたようだ。春足江戸下向

中の親密な交流はこれ以外にも「久々の御下着ゆるゆる対面（2-19-3）」「実ニ久々之御下向（2-30-1）」「御来話待つ（2-30-2）」「夕食への招待（2-30-3）」などからも伺うことができる。

三、『雅言集覧』大平序文仲介

石川雅望の名著『雅言集覧』に本居大平の序文が載せられたいきさつについては粕屋宏紀氏が『石川雅望研究』にかなり詳しく紹介されている。その根拠となった書簡が今回の調査で明らかになったので画像番号（2-2-2）と（2-13-3）については全文を、その他については関係する箇所を抜き書きし、全体の流れをもう一度たどってみたい。（なお①～③の数字は時系列に沿って並べようと思ったが②以降は内容が錯綜して判断がつきかねるので張り込みの順序に従った。）

①雲多楼大人宛て六樹園書簡（十一月一日付け）『雅言集覧』編著の意図（2-2-2）

奉察居候蜀山人墨跡

[illegible]

候や

[illegible]

源注余滴おほかた校合いたし

候へ共今少々骨をりいたすへく

存候それよりさきに

雅言集覽と申物出し可申

と存候これは多年見るに随ひ

諸書より同語をぬき出し置候

文章かきならひ候人のために

益も可有之候や此節これを校

正いたし罷在候

新作の狂歌集出来候節

御詠加入いたし候事承知仕

罷在候占正方へ御状早々相

届申候

蜀山人醜婦の賃?に三平

二満の事御尋被下候これは

東坡か詩ニも有之禪録など

にも有之事とおほへ候あと方

書つけ可奉呈候今朝急ニ

八丁堀へ幸便有之いそぎ

申上候御詠藻返上仕候くれくれ

家内一同よろしく申上候やう

御座候 謹言

霜月朔日

六樹園拝

雲多楼大人

【語注】

*蜀山人墨跡 現在、遠藤家には蜀山人墨跡が数点残されている。

*万代集 『万代狂歌集』（宿屋飯盛撰 文化九年刊）春足は二

十四首入集している。

*三平二満（さんぺいじまん） ①「二」は数の少ない意。三

でも平安、二でも満足の意からか、満たされない状況にあっても心

が平安で満足していること。②額・鼻・顎が平らで、両方のほおが

ふくらんでいる顔。おかめ、おたふく。（日本国大）

*八丁堀なる阿波や 藍商としての遠藤宇治右衛門江戸店が阿波

屋吉右衛門名で八丁堀三丁目にあった。

【気づき】

〇この書簡、粕谷宏紀著『石川雅望研究』p207に「雅言集覽と申

物出してとく此節これを校正いたし罷在候」の部分が引用されて

おり、解説部分に次のようにある。

「右は徳島の遠藤家蔵のものである。後年春足の尽力で紆余曲折を経て『雅言集覧』は陽のめをみるのであるが、右の文面からすでに文化初年ごろより執筆にとりかかっていたことが分かる。また同書を古語の辞典ということだけではなく、文章を書くための「ことばの手引書」という性格を持たせていたことがうかがえる。」

なお粕谷氏はこの項目を文化八年とされているが、文中に「其後万代集一部八丁堀なる阿波やへ差出し候此節相届候や」とあり、「万代集」は『万代狂歌集』をさすと思われるから本書簡は『万代狂歌集』の刊行文化九年九月以降と思われる。

②遠藤君宛て雅望書簡（六月十二日付け）『雅言集覧』只今校

合中、来秋発兌予定。大ニ勞し九割り方原稿出来。『源注余滴』『あつまなまり』『武者つくし』『狂哥職人尽』についても言及あり。

（2-5-1）

雅言集覧此節もはら／校合取かゝり昼夜とも／この事斗ニ消日罷在候／いつれ來秋か冬ならてハ／発兌ニは及かね可申存候／源注ハいまた校合も不仕候／あつまなまりこれハらちも／なき物なから此節彫刻ニ／かゝり罷在候当年中ニハ／書肆にて売出し可申候／出来しだい直ニ御届可申候／武者つくしも会主をこたり／にていまた成就

不仕候／さき／出候狂哥職人尽／ハ御覽被下候や（中略）雅言集覧ハ大ニ勞し候て／とりあつめ候十カ九ツハ／草稿もいてき候御近所／に御座候ハ／御ちからをもち／可申事ニ候へ共さて／／まかせさる事残念存候

③雲多楼大人宛て五老山人書簡（十月十三日付け）『雅言集覧』其後たいくつ、すて置く。（2-8-1）

雅言集覧其後たいくつ／いたしすて置候都てふりも／いまた後篇出来不致候／六百番清澄企候へ共焼宅／のさわぎにて万事盛砂／文丸兩人にてせわいたし候

④雲多楼君宛て雅望書簡（五月十七日付け）『雅言集覧』此砌もつはら校合増補。（2-8-2）

雅言集覧／此砌もつはら校合増／補つかまつり実ニ繁多／一向門外へも不罷出候

⑤六々園大人宛て六樹園書簡（六月二十五日付け）雅雄、遠藤家逗留御礼（2-12-2）

此節雅雄事／讃州より御地へ罷出候／よし嘸々御厄介と奉存候／これは元来上州高崎／の住人にてたしかなる／ものニ有之少々緑(?)を／つかひ過し候とて老母か／こらしめ候とて江戸へ／出し置候随分正直なる／奴にて此方盛砂方へ／文通いたし殊之外御世話／に相成候趣吹聴申来候段／盛砂より承り於私ニも／奉感謝候

【語注】

*雅雄 六帖園雅雄(ろくじょうえんまゐ) 1794～1830 江戸時代後期の狂歌師。寛政9年生まれ。上野高崎の商人。五側の判者をつとめ、高崎水魚連の中心人物として活躍した。文政13年8月13日死去。33歳。姓は大谷。通称は桐屋三右衛門。別号に桐雅雄、桜の壺。(デジタル版 日本人名大辞典+Plus)

⑥(宛先・差出人名なし) (十月十二日付け) 『雅言集覧』当年中ニイカ篇を先に出すつもり 序文本居大平へ依頼の件よろしく頼む。(2-12-3)

雅言集覧当年中ニイカ篇／先出し候つもりにて司馬園事／骨を折候如何可有候や付而／序文之事大平大人ニ／御たのみ可申やの事雅雄

／より内々ニ申来り候これは／何様可然事にて候もし出来／いたし候事ならハ御恵被下／御願可被下候

⑦六々園大人宛て五老書簡(二月四日付け) 『雅言集覧』校合すり送付、大平への依頼の件よろしく(念押し)。(2-12-2)

雅言集覧序文之事ニ付／御心配奉謝候少々校合すり／さし上候よろしく御取斗可被下候／雅雄長逗留御厄介之程／御礼可申上様も無之奉存候／(中略) 右雅言集覧はしかきの事／くれくれも御苦勞御願可申候／偏に御たのみ申上候

⑧六々園大人宛て五老書簡(二月五日付け) 『雅言集覧』すりたて送付。大平の序文催促。(2-13-1)

先達而雅言集覧廿枚斗すり／たて御届申上候如何無相違着／いたし候事や承り度候／序文の事これも其後いなや／不承申候ひとへに御面倒なから／かの先生へ御たのみ可(被下?)候貴兄のも一同ニ被遣度候

【気づき】

「先達而く被遣度候」粕谷宏紀著『石川雅望研究』225に引用。粕谷氏は二月十五日付けとしているが正しくは二月五日付け。

⑨遠藤宇治右衛門宛て本居左衛士（清島）書簡（四月十八日付け）
大平序文引き受けの知らせ。（213-3）

三月五日之御状同廿日比相届

辱拝読致候愈御清安被

成御入候由奉幸甚存候拙家

無異居申候乍慮外御放念

可被下候

一此度御見せの雅言集覽校合

すり初のかた一見いたし候処集

ぶりに極宜敷相見え申候夫二付

御頼之通右序文いたし相認

上申候甚多用中御断も申入度

存候へとも折角遠方御頼之事

故と存作文いたし申事二御座候

扱右集覽作者六樹園

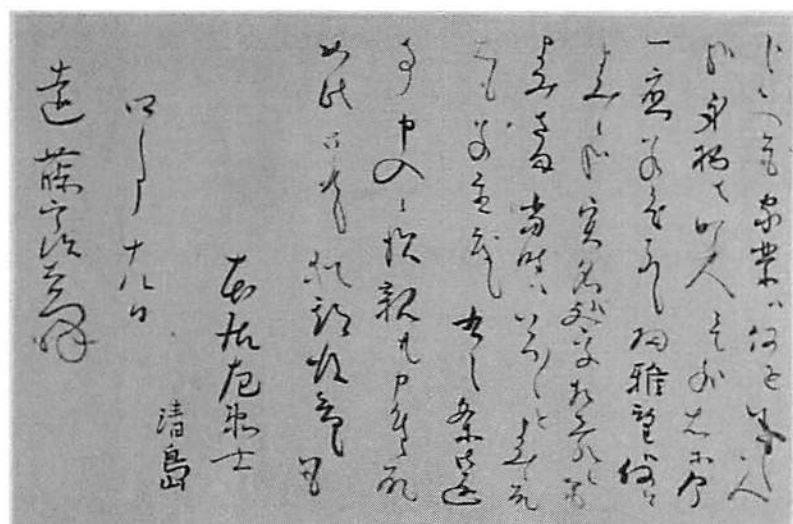
俗称別号等御書記して相わかり

申候へとも家業ハ何をいたし候人

や身柄は町人ニてや右等今

一応承らで候扱雅望ハ何と

よみ候や実名ハ文字相しれ候所



本居左衛士

清島

四月十八日

遠藤宇治右衛門様

【気づき】

○この書簡、粕谷宏紀著『石川雅望研究』p.42に詳しく紹介されている。(ただし清島書簡原文と相違するところ多々あり。) 粕谷氏は見出しに「四月十八日、本居大平の序文が、本居清島の送り状とともに、遠藤春足を通して雅望に届く」としているが、四月十八日という日付は本居清島が本状を春足あてに差し出した日付であり、大平序文が雅望に到着したのは次の雅望書簡によつて確認できる六月七日以前ということになる。何かの勘違いと思われる。

⑩遠藤大人宛て五老書簡(六月七日付け) 大平序文受け取った。

(2-14-3)

よみさま当時ハいろいろとよみ候故
右も承置度候右之条御返
事申入候様親共申付候故
如此御座候猶期後音申候 以上

然は大平先生序文御届／被下千万ニも大慶奉／謝候偏御心配？感佩仕候／付而菲薄なから寸心をも／表し度奉存候所御さしとめ／之趣文丸申候故？二／不及其事？而ゆく／御礼も仕り度候くれ

く／御ついでによく／此かしこ／まり御？可被下候（中略）大平先生御俗称存不申／白帟にて上候政雄二代筆／かゝせ可被下候／

⑪六々園大人宛て五老書簡（十一月二十日付け） 大平へ御礼として水晶の印台送ったが未だ返書は来ない。（2-273）

本居氏へ少々の品上候様ニ／雅雄より申来り候間何も／めつらしき物も存寄り不申／水精之印台を進上仕候但／いまた返書ハ来り不申候定而／相達候事？奉存候

⑫遠藤宇治右衛門宛て大平書簡（尚々書きのみ 日付不明） 雅望から印台受け取った。（2-274）

尚々江戸の石川雅望ぬしよりも一兩度／直々文通御座候印台とかいふ角なる／玉石もおくりくれられ申候且又よし原／十二時とかいふ作書も見せに来り候おもしろ／き物御座候

【気づき】

粕谷宏紀著『石川雅望研究』122に引用あり。粕谷氏はこの引用の

あとに「松阪の殿村安守宛ての大平書簡『藤垣内消息』」としておられるが、この書簡は現に遠藤家文書の中に残っており、殿守宛てではない。

⑬六々園大人宛て五老書簡（一月二十一日付け） 『雅言集覽』十部（春足方へ）到着の由。売れ行きについて。（2-282）

雅言集覽十一部共両度ニ／着仕候由安心仕候右ハ二百部／すらせ候処極月晦日迄二先／のこらす売捌候併本屋へ／不相渡候故ひろりかた少々／不無理ニ有之候それ故所々

知己之御方々之厄介にて／披露いたし候事ニて候ちりぬる之／糸も当年之中差出度存候／御隣国などへ御聞合追々／御ひろめ可被可候

⑭六々園大人宛て五老書簡（七月十八日付け） 紀州本居氏より三部注文あり。（2-311）

今頃紀州本居氏より／書状参り雅言三部松坂／へ遣し候やう御申し二付即／差立候小子土用中より／眼病故筆を採かね候故／紀州へいまた返書遣し不申候／御ついても候ハよろしく御申可被下候

⑮六々園大人宛て五老書簡（二月二十日）『雅言集覽』当年中一篇出した。 (2-32-1)

雅言集覽当年一篇出し度／存居候

⑯六々園大人宛て五老書簡（四月二十八日付け）『雅言集覽』四之巻出来。 (2-34-1)

尚々集覽四之巻出来仕候／これハ別封にてさし立候

⑰六々園大人宛て五老書簡（五月六日付け）『雅言集覽』四の巻送った。 (2-33-1)

一雅言四の巻先達而御さし立候

⑱六々園大人宛て五老書簡（十一月二十一日付け）『雅言集覽』四之巻八冊返品受け取った。同五之巻出来。 (2-33-3)

雅言集／四之巻八冊御かへし被下／収納仕り候（中略）雅言五之巻出来ニ付上候／一部代銀拾式匁五分ツゝニ／有之候

⑲（宛て先・差出人・日付なし）狂蝶子文丸又は盛砂書簡『雅言集覽』大平序文仲介に対する謝礼。 (1-28-1)（本文省略）

⑳六々園宛て五老書簡（五月十二日付け）『雅言集覽』今年中によたれの行出来予定。本や仲間のクレームがつき掛け合い中。 (2-38-3)

雅言集覽今年中／にはよたれの行出来と存候これハ／内々本やへ託し候へ共板内々／にて候同仲間の中ニ故障を／申候本屋有之そのかけあひニ／懸り居御いそきと存候故昨今／うちかゝり校合返上仕候

㉑六々園大人宛て五老書簡（四月二十九日付け）『雅言集覽』四之巻送った。一部南鐐一片。 (1-6-2)（本文省略）

㉒六々園大人宛て五老書簡（五？月二十六日付け）『雅言集覽』此節序文を彫刻中、やうやく本文成就 (1-21-1)（本文省略）

㉓（宛先なし）五老書簡（二月二十五日？）『雅言集覽』到着の由、 (1-35-1)（本文省略）

四、宗匠号授与事件（文政十一年）

この事件については粕谷宏紀氏が『石川雅望研究』の中で『永久田家務本伝』から関係資料を引用し、詳しく述べておられる。遠藤家文書の中にもそれを裏打ちする資料が数点残されている。ここでは重複を避けるため、『石川雅望研究』に掲載されているものは項目だけ、掲載されていないもの、及び原文と多少の異同がある⑤⑥については全文を掲載する。

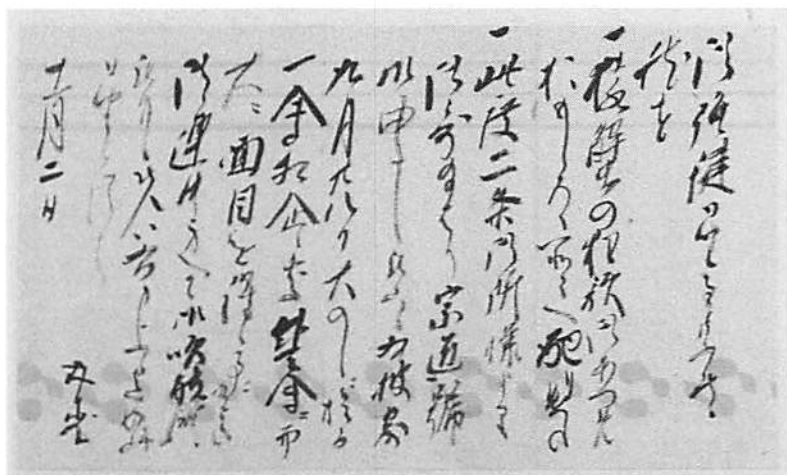
①（春足宛て）五老書簡（3-2-2）

御強健御由奉察居候／然は／一猿蟹の狂歌御あつめ／おもしろく
所々へ配り遣し候／一此度二条御所様より／御哥給はり宗匠号／御
ゆるし被下候爲披露／九月廿八日大のしニ於て／一會相企候處盛會
ニて／大ニ面目を得候事ニ有之候／御連中方へも御吹聴可／被下候
先ハ右申上候迄如此／御座候謹言 十一月二日 五老

②授与の折、二条左大臣齋信公から賜った歌と雅望の返歌。（3-2-1）
『石川雅望研究』と同内容。

③二条家から宗匠号を授与されたことについて披露并祝宴案内。
（3-2-3）

『石川雅望研究』と同内容。



④宗匠号拝受を祝う春足の狂歌。(3-24)

わか師の君こたひ／左のおほいまうち君より／御歌給はり宗匠の号を／さへゆるされ給ひぬるよし／つたへきゝはへりて

おほかたのにほひ／なりせは／雲井まで／いかゞしられむ／あい

まねる梅／六々園 春足

⑤二条家より宗匠号を授与されたという書き物。(3-3-1)

六樹園

所諷詠之俳諧歌者不学而以自

則千家流之舊式矣可謂天然之奇

才也感賞有余因推授宗匠号

益驅徒弟以宜復古是道者

台命如件依而執達如件

二条殿家司

藤木越後守

文政十一歳次戊子五月

奉

大村監物

六樹園

所諷詠之俳諧歌者不学而以自

則千家流之舊式矣可謂天然之奇

才也感賞有余因推授宗匠号

益驅徒弟以宜復古是道者

台命如件依而執達如件

二条殿家司

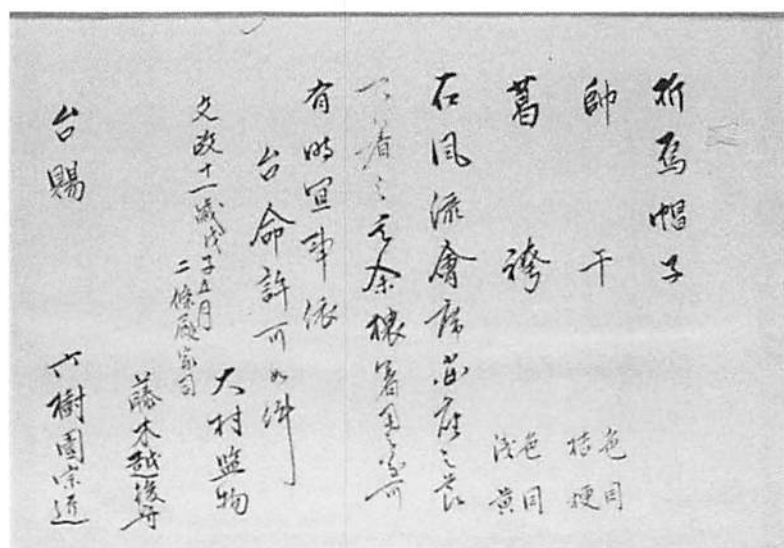
藤木越後守

文政十一歳次戊子五月

奉

大村監物

⑥ ⑤に添えられた書き物。折烏帽子・帥干・葛袴の着用を許すというもの。(3-3-2)



折島帽子
帥 干

色目
桔梗

葛袴

色目

浅黄

右風流会席當座之節

可着之其余猥着用之義可

有時宜事依

台命許可如件

大村監物

文政十一歲戊子五月

二條殿家司

藤木越後守

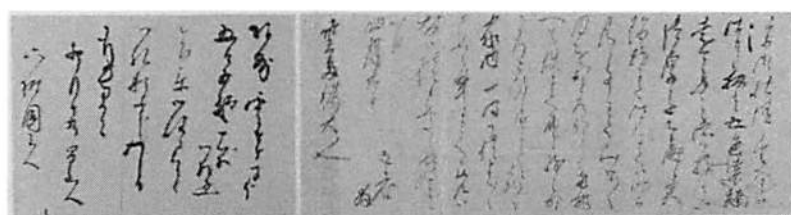
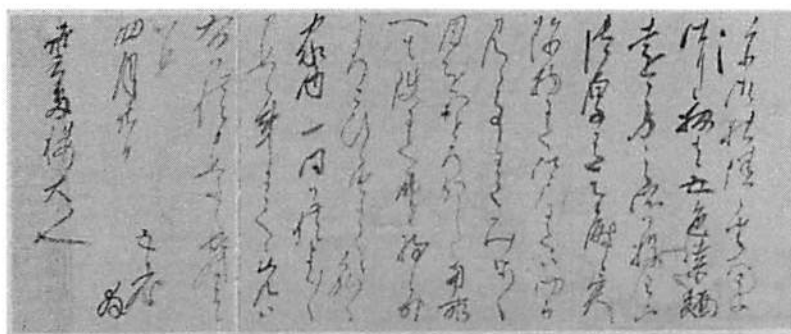
六樹園宗匠

台賜

【氣づき】

雅望の晩年に起こったこの「(俳諧歌) 宗匠号授与事件」というのはまことに奇妙な事件である。詩人の大岡信氏も『大田南畝全集』第一巻月報で「後年(文政十一年)、京都二条家から真顔・飯盛に宗匠号が授けられるという出来事があり、これが実は何者かによるあくどい悪戯だったのに二人はそれを知らずに受け、しかも真顔はこれを利用してますます巾をきかせたという落ちまでついて、何ともおかしい因縁続きだったが・・・」と述べている。

五、雲多様宛て五老書簡 五色素麺の礼、南畝にもお裾分け。
(2-3-2)



弥御壮健之由大慶
仕り候扱は五色素麺
遠方之所御授被下

春足から師・雅望への謝礼は様々な機会に様々な名目で贈られたことが雅望のその度、この丁寧な礼状によって分かる。その中で少し変わったものとして素麺の贈り物がある。当資料に出てくる「五色素麺」なるものは最近は見かけないが、私の子供のころの記憶によれば通常の素麺（白）に黄、青、赤、緑の四色を加えて五色にしたもの。仏教の五雲にちなんだものらしい。この書簡にも見られるように当時大変珍しく好評だったとみえ、春足は方々への贈り物にしている。さて春足は夏に向かう四月廿日、雅望へも一箱（これは今の土産物店などで売っている薄っぺらな箱に入ったものではなく、昔のリングの木箱のようなものだろう。素麺は風流な食べ物というよりも貴重な保存食として重宝がられたのである）贈ったところ大変喜んで蜀山人のところにしてお裾分けしている。蜀山人がその礼状を雅望に託したものと解釈できるが、疑問が残るのは2-3-2と2-3-3が同じ紙を使っているように見える点である。日付、筆跡も含め今後の調査を待ちたい。

六、文政十二年江戸大火

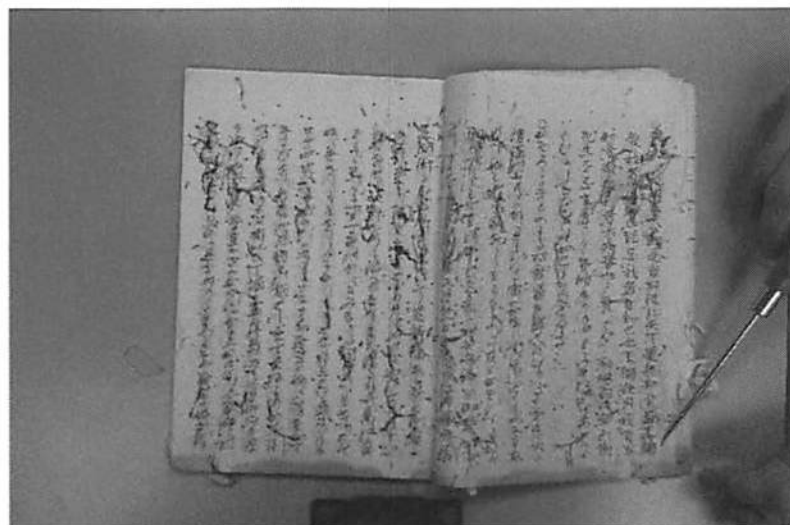
文政十二年の江戸大火は春足の江戸店を焼いたばかりでなく、師・雅望の住居も焼いてしまったのである。この大火により雅望は

万卷の蔵書他、雅言集覽、源注余滴の草稿まで失ってしまった。粕谷宏紀著『石川雅望研究』によると、この火事は雅望にとって相当ショックだったと見え、この後寝込みがちになり、約一年と二ヶ月余りの後の天保元年閏四月二十四日、死去したという。なおこの大火後、雅望から来た書簡は「16」にあるが、日附は五月二十一日となっており、この書簡で言う「四月廿五日」より後のものである。

①六々園漫録「おそろしきもの」(P2102256)

○おそろしきものよる鳴雷家に盗人の入りたる近き火と清原のおもとハかゝれけれと雷ハかならず落へきものにもあらすぬす人ハ家をしもとるものかハたゝおそれてもおそれつゝしみてもつゝしむへきハ加具土神の御怒にそありける???文政十二年三月廿一日?はかり江戸神田佐P2102256

久間街といへる所より火いでて芝新橋あたりまで縦ハ五十丁あまり横ハ三十丁ばかりただやけにやけてさしもいらかをならへ軒をつらねて造りまうけたる千万の家どもゝわづかに一ト日一ト夜のほどにみながら烟?しもなりはてぬるぞをしともをしくかなしともかなしきわざなりけるさて此火の???おのれハきくことのうち驚きぬることすべて



五たひなりさるハ四月朔日の朝はじめて大坂よりかくと
つげきたりけるに南北八丁堀霊岸島ものこりな
うやけぬる??なれハさハかまへおきつる家師の
??館なとものかれざめりとまづうち驚きぬまた同廿五日

師の君のもとよりせうそこあり霊岸島ハ火のもとへハ
と遠かりけれどこちの風下にてありけれハたちまち火

?びうつり?ちかきあたりよりハなかなかなにはやうもえ出

P2102257

けれハみなあはてまどひいのちをうしなへるもいと

多かりしとそされハ塵外棲ぬしなともよろづのことハう

ちおきて??(ただ?)翁御夫婦をのミたすけまぬらせつゝい

そぎたちのき給ひけるにはやくも火??(もえ?)きたりてほと

ほと髪の毛もやけぬへうなりきけれハ何くれの調度か

は(ら?)やまとの書どもハさらなり年ころものし給へる雅言集

覧源注余滴の草稿をさへえとり出給ハてのこりなう

やき給へり?か此二ツの書ともハ翁がまたいとわかうおハせ

しほとより凡四十年^{ヨットセ}あまりよるとなくひるとなく

???(ひたすら?)ものし給へる書^{アキ}なるをかう一時にしもなく

なし

P2102258

けるはあさましともくちをしともいはんすべなうそおほ

えたる??(これ?)ぞおのれか三たひの驚きにハありけるまた

おなしとき塵外棲ぬしよりもせうそこありてはやうこそ

の冬おのれか企つる猿蟹物語狂哥合いとめづらかなりと

て遠近^{ワタニ}よりう？（た？）どもいとふさにつどひよりておほかた二百人

ばかりにもおよびぬるを春友亭梅明のきておのれかもと

にも三四十人斗りもあつまりてあなれハいで一ツになして

？？おくら？とてかしこにもてかへりぬるをあやにくにえさり

がたきことのできて？？？？といひをりけるほどにつひに此

火のワザハひにハあひぬといひおこせぬこれぞおのれか四たひ

P2102258

のおどろきにハありける其のちおなじ廿七日博勞街の

西村与八といへるよりもせうそこあり此博勞街ハ

火のもとへハいとちかきわたりなれと風のすちにあらざれば

霊岸島八丁堀などよりハ猶のちにやけたりとぞされハ

はじめハうたがひなくのがるべうおもひて心のうちゆうよ

してありけるを俄に火とびきたりてもえ出けれハいつ

れもくハくハといひていみじうあわてまどひけるとかやさて

書どもいれたるに塗籠^{ヌリコ}ハことなうのこりたれと年ころの

多り板どもをいれたる塗籠^{ヌリコ}やけうせてそこはくの多り

板をはしめおのれが白痴物語の板をさへやきぬとか

P2102259

此？？？？（物語こそ？）の冬はじめていできておのれがもとへも

まづ試

にとて？？すりておこせたれどそこゑり人どもの誤

？？ふしふしも多けれハことし春おのれかく？へただし

などしてやりていまだ一部も世には出ざるほどなるにはや

くも灰燼となりぬることくちをしなどいはんもなか

なかなりこれぞおのれか五たびいみじき驚きにハあ

りける（以下略）

【語注】

＊おそろしきもの 「せめておそろしき物、よるなる神、ちかきと

なりにぬす人のいりたる、わがすむ所にきたるは、ものもおぼえね

ば、なにともしらず。近き火またおそろし。」（『枕草子』第二百

六十四段）

＊加具土（の）神 （カグツチ） 記紀神話における火の神。『古

事記』では、火之夜藝速男神（ほのやぎはやをのかみ）・火之炫毘

古神（ほのかがびこのかみ）・火之迦具土神（ほのかぐつちのかみ）

と表記される。また、『日本書紀』では、軻遇突智（かぐつち）、

火産靈（ほむすび）と表記される。（註二）

＊文政の大火、文政二年三月二日に江戸で発生した大火。神田佐

久間町から出火し、北西風により延焼した。「己丑火事」「神田大

火」「佐久間町火事」などとも呼ばれる。焼失家屋は三万、死者は

2800 人余りに達した。神田佐久間町は幾度も大火の火元となったため、口さがない江戸っ子はこれを「悪魔（アクマ）町」と呼ぶほどであった。火災の原因は、タバコの不始末であったという。松本清張の長編時代小説『逃亡』は、この大火を背景としている。（wiki）

②六々園宛て 五老書簡（3-16-1）

御多福奉賀候類焼

御訪被下金百匹御授被下

忝御掛心奉謝候猿蟹

ハ江戸にて梅明方にて集候所

火災にてみな焼失とのこと

きのとく奉存候去年中序文

これハ届不申候やせんさく可被下候

此度の火災すきやかし??

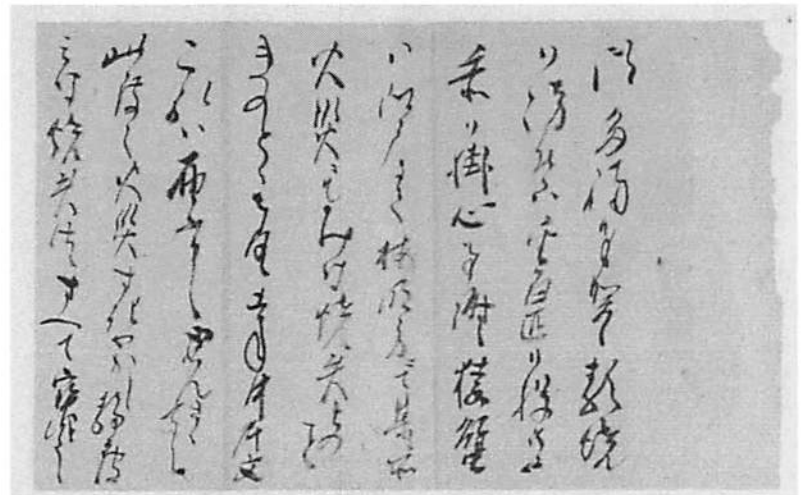
みな焼失仕候すへて宝といたし

候物ハ何方も紛失と承候

小子も集覧焼失草稿も

無之遺憾奉存候

歌雄兄へよく／＼御礼御頼申候



さるかにの序文あとより上可申候

文事ハ天より奪ひ取事と

あきらめ候

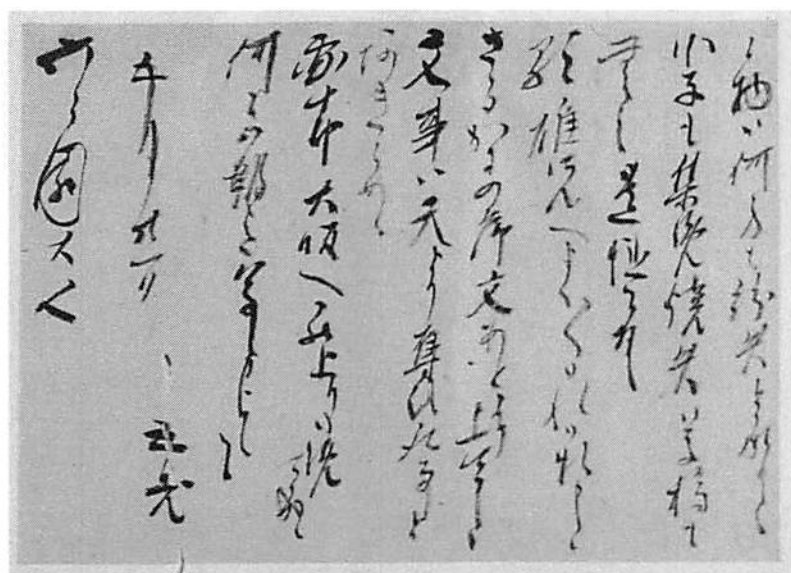
團十郎大坂へ罷上御覧可被成候

何も御報迄早々申上候以上

五月廿一日

六々園大人

五老



③ (七代目) 市川團十郎 歌川画 似顔絵 と六樹園賛(扇面
 (3-16-2)

歌川画

人言荒事

外無類

江戸市川

團十郎

六樹園

【気づき】

市川團十郎家は江戸荒事の祖と言われ、代々この絵のように大きい目玉を売り物にしている。賛は「人は言ふ 荒事 外に類無し 江戸市川團十郎」。衣裳は市川家ゆかりの瓢箪(ひょうたん参照) 木村涼氏によれば團十郎も芝居小屋が消失し五月から大坂中の芝居に出演していたそうである。

七、石河^(いそ)雅望ノ伝 (六々園漫録二 p2102281)

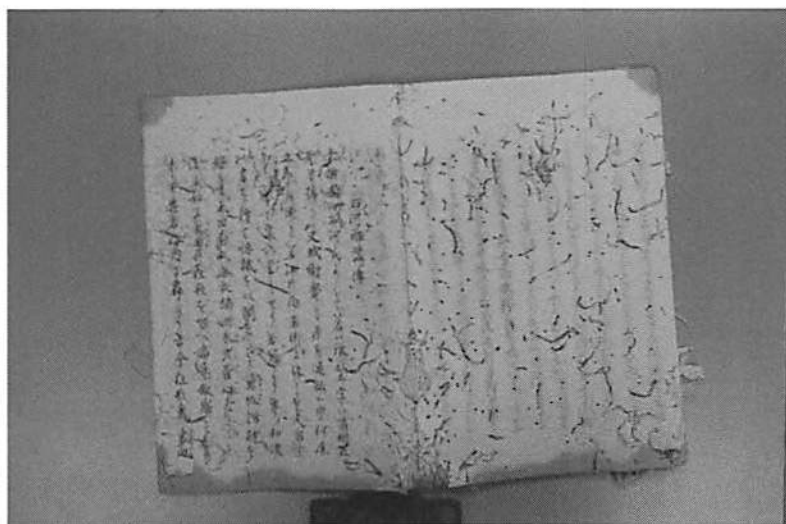
石河雅望ノ伝

六樹園ハ石河氏にして名ハ雅望字ハ子相五

老と号しまた蛾術齋と号す通称ハ中村屋



五郎兵衛といふ江戸伯楽街に住してヤト人宿す
 ことをもて家の業とせり。若冠より専ラ和漢
 の書を読んで博識を以聞えたり資性諧謔を
 好みて大田南畝唐衣橘洲朱楽菅江などゝと



もに始て東曲の狂哥を唱へ宿屋飯盛と号
 して其名海内に轟けり古今狂歌囊東曲
 狂歌文庫等其初手に撰する所なりみづか
 ら詠る秀歌最多しといへとも就中人口に膾

炙するものハ

歌よみは下手こそよけれ天地の

うこき出してたまるものかハ

といへるなりいかなることにか中ころ不慮の禍

ひにあひてもとの住所をさり四ッ谷新宿にう

つりて此所にひそミをること数年其間みづ

から狂哥の社を逃れていよ、和漢の書フミを

渉アナクリヨミオモヒ獵念を著述に傾けて雅言集覽の企あ

P2102282

りまたふかく源氏物語を好みて精読する

こと数多度アマタタシ時の人五郎の源癖としていみし

きことにいひあへりつひに原注余滴甘巻を

著して大に古人の不得解ことを発明するこ

と??またかねて稗官セウセナの学を好み通俗醒

世恒言同排悶録等著し或ハ戯に飛驒内

匠物語淡海縣物語等を作る其後文化の始

め人々にそゝのかされて再狂歌の社を開

きけるに門にいるもの甚多くしてはやく

此道を以帷をはり家を立つともから皆翁の

ために鋒銳ホウスイをさけさるハあらずなむ同十二

年家を靈岸島湊街にうつしてますます

此道を唱へけるにつひにその派流三千余国に

みち其社にいるもの三千余人に及へり実

古今未曾有の盛事といふへし狂歌万代

集狂歌作者部類職人尽狂歌合飲食狂

哥合吉原十二時狂歌集金石狂哥集等皆

其撰をする所なりまた倭文章ミヅナフミかくことに長し

て都のてふり里梅枝物語蠹巢シシノスミカ栖物語等の作

あり或ハ源氏枕双子等の筆意にならひ或ハ

P2102283

今昔物語宇治拾遺等のおもかけをうつされ

たるにいつれもよく古人に彷彿たり近世

賀茂真淵大人本居鈴屋ノ翁などいへる人々の

出てより以来皇国コノカタミクニの学を以世に鳴文章フミか

くことをもてみづからほこりたる人々?是彼

ありといへとも此翁とたけくらべせんには跡を

くらまして逃さるはあらさるべし其説に曰我

皇朝風ミクラニフウの文章かゝんとならば延喜より花山

一條の間の体をまねぶべし今? (世?) にもてはや

する古学家風コガクニフウといへるこそ最モトいとふべき

P2102284

ものなれざるハ其文章上古の風か

とおもへはさハなくて大抵中古のすかたなる

にこゝにもかしこにもきゝなれぬ古き詞

どもの交りありてうたてきゝくるしきこと

鄙人の偶都二(?) 出て強に其ものいひをまねひ

いへるかさすかにすみなれし国言のをりをり

うち出て可笑きに異ならず近世の倭文章

にハ大かた此病なきハあらざればまづ此病を

清くさらんことこそ皇国風の文章かくこと

の第一義にハあなれとハいはれきされハ清水浜

P2102228

臣片岡寛光などいへる輩も陽にハいたく

此翁をにくみそしりたれと陰にハふか

く其説を感て常に文などものするには

もはら此翁のをしへにしたかハれしとぞ

また狂哥を評するの暇に何くれ戯文

をかゝれけるに諧謔百般大に人の顎を

解しむ其集を吾孀奈満理といふ上梓し

かくの如くなりといへども聊も傲慢の気あ

ることなく実に世とよく押うつるの人にて

P2102285

ものしらぬ狂哥者流といへとも終日話し

てさらにうむことなしされハみつから儒者を

以をらず又和学を以をらずただ狂歌を

任として其党にのみ交り遊ハれたりされ

はあまりに狂哥の名の世に高きによりて

かへりて学才の聞えを蔽ふにいたるももし

此翁をしてかく狂哥の徒に交ることなから

しめば嚴然たる皇朝学の博士にして其

右に出る人あらざるべし然ともつひに其

大名雲の上までもきこしめされて文政十一

P2102285

年五月

二條左大臣殿より御歌にそへて烏帽子水干

を賜はり誹諧歌の宗匠たるへきよし許

をかうふりぬ

其御歌曰

咲そめて色めつらしき梅かえは

なほたをりても見はやとそ思ふ

御かへし

たをりてもかひあるへくもおもほえず

老木の梅のいろかうすきハ

P2102286

かくて同十二年三月神田より火出て霊岸

島鉄炮洲にいたるまで残りなく焼わたり

ける時翁の館もこの災にかゝりて雅言集

覧源注余滴をはじめ年来著ハされたる

書の草稿ともみながら焼うせにければ

翁も大に望をうしなひ深く歎き思は

れつゝ是より後ハただふしがちにて枕をの

ミ友にてくらされけるかつひに天保元年閏

三月廿四日齡七十八にてみまかり給ひぬ則

某の寺に葬りて俗名六樹院臺譽五老

P2102286

居士と申しき

天保二年十二月七日

六々園春足誌

【語注】

*某の寺 石川家の菩提寺である蔵前の榎寺（かへでら）（正式には正覚寺の子院哲相院）

【気づき】

この文章は雅望の没後一年九ヶ月足らずの時点で書かれたものである。今と比べて比較にならないほど情報量の少なかった時代、しかも阿波の徳島という江戸から遠く隔たった地で雅望の人となりの要点を余すことなく記述していることは驚きである。（参考にした資料があるかどうかは未確認）。入門前から雅望に心酔し、教えを受けていた春足ならではの追悼文である。粕谷宏紀氏の『石川雅望研究』によれば、長男塵外楼清澄は墓の側に石碑を建立したが、その石碑は今はなく、碑文（吉田勇雄撰文の漢文）のみが残っているとのことである。とすればこの伝は貴重なものではなからうか。